小林行雄博士訃

芹沢長介 東北大学名誉教授（1973年12月14日撮影）のご好意による提供

京都大学名誉教授、文学博士、小林行雄先生は、平成元年二月二日午前五時五十六分、結腸癌のため京都市左京区の病院で永眠された。享年七十七歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。戒名は楞厳院徹翁行然居士。徹は一徹から。

博士は明治四十四年八月十八日、神戸市にお生れになり、兵庫区の楠小学校を卒業、兵庫県立第一神戸中学校に入学、第四学年には化石の採集に歩かれ、第五学年になると遺跡歩きと遺物の採集にかわられ、当時明石に居住していた直良信夫の手ほどきによって考古学の世界にはいられた。昭和四年四月神戸高等工業学校建築科に入学されたが、弥生式土器の研究を目指され、七年三月卒業とともに建築科副手となられてからも、その研究を続けられた。ちょうどこの頃、考古学界に新しい研究法を導入しつつあった森本六爾と出会い、弥生式時代研究の基礎となる多くの論文を相次いで発表された。この一連の研究が京都大学考古学講座の濱田耕作教授に認められて、昭和十年八月に京大文学部助手となられ、二十八年四月講師、四十九年十一月教授、五十年四月一日停年退職され、同二日名誉教授となられた。この間に史学研究会の評議員と理事を務められた。

『史林』に発表された考古学関係の論文のなかで、小林博士の「古墳の発生の歴史的意義」（第三十八巻第一号、昭和三十年一月）ほど、多くの研究者に精読され、また引用された論文はないであろう。伝世鏡論と同笵鏡論を基礎とする、日本の古代王権の成立状況の究明について、考古学的方法の可能性を大きく拡大した論文として高い評価を受けているものである。そして『史林』に発表された古墳時代に関する論文を中心にまとめた『古墳時代の研究』によって、昭和三十七年三月に京都大学より文学博士の学位を受けられた。

博士はまた、研究の進め方についても、二つの重要なモデルを示された。一つは集成であり、もう一つは発掘報告書の体裁である。集成なしに遺物の研究を進めることは不可能であるが、有用な集成を呈示することはかなりむずかしい。昭和十三年に東京考古学会から出版された『弥生式土器聚成図録・正編』は、「美術の遺物をただ一つ見たるものは何者をも見ず、千を見たるものに

して始めて一つを見る」という格言を実行に移したものである。美術の遺物でも考古学の遺物でも、この場合、同様であろう。その増補改訂版ともいうべき『弥生式土器集成』四部も、昭和三十三年から四十三年にかけて多くの研究者の協力のもとで刊行され、『大和唐古弥生式遺跡の研究』とともに、弥生文化研究の基本文献になっている。唐古の報告書は、弥生遺跡の報告書のモデルでもある。古墳にかんしては、『福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究』（昭和二十七年）が、発掘報告書の第二次大戦後におけるモデルとなった。それは、発掘によって明らかにされた事実を記述する前篇と、その事実に関連する同種の遺構や遺物についての考察および全体の結語ともいうべき年代論からなる後篇とから構成されたものであって、博士によると、これは滋賀県鴨稲荷山古墳の報告を模範としたとのことであった。

博士は日本考古学だけではなく、大陸の考古学についても重要な業績を残された。その一つが、京都大学文学部から、田村実造博士を隊長として昭和十四年に派遣された、遼代陵墓の調査の報告である。それは考古学の分野だけではなく、壁画や切丹文字をも含んでいて、美術史、文献史、言語学などの研究にも重要な資料を提供するものであった。その優れた業績をもり込んだ研究報告書『慶陵—東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁画に関する考古学的調査報告』2巻（昭和二十七・八年）は、田村博士とともに昭和二十八年度朝日賞と昭和二十九年度日本学士院恩賜賞を受けられた。博士のこれらの優れた業績は、厳密な発掘の進め方とその用意周到な記録方法に支えられていた。それは、報告書作製の時点で、それらの記録類をいかに使うかを、あらかじめ考慮した図面作製の原則と写真撮影の方向や枚数などにみられた。問題意識をもった体系的な発掘の進め方によって、多くの事実が確認されたのであり、昭和二十年代に確立したその方法が、今では日本考古学界における共有財産になっているように思う。

博士が調査方法をほぼ確立された頃、昭和二十七年四月に、私は新三回生として京都大学文学部考古学研究室へ行き、充実した考古学実習を博士から受けることができた。実習は二年間で終るように計画されていて、最後の課題は遺物に関する報告書用の記述で、一貴山銚子塚古墳の方格規矩四神鏡があてられた。この鏡の背文は明瞭なので、当然図版になる写真に見えない、あるいは分りにくい点にほぼ限って記述した。一読された博士は、私の意図を汲みとった上で、写真で分っても文章による説明の必要なことを注意して下さった。ずっと後に授業を担当するようになった時、新三回生の演習として「遺跡・遺物の観察と記述」を始めたのは、この時の経験と、翌昭和二十八年の梅原教授による演習とから編みだしたものである。博士から考古学の進め方について非常に多くのことを教えていただいので、若い研究者にもそれらを伝えたいと思って努力している。

終りに謹しんで博士の御冥福をお祈りする。（小野山節　記）